信州と少年と英語

水上　龍郎

この稿を書く半月ばかり前、私は山梨県の甲府を訪れた。七申会（ななざるかい＝昭和7年さる年生まれの会）と銘打った小学校の同窓会に出席するためである。

私の生まれたところは長野県（信州）の岡谷市である。その東南側は諏訪湖に面し、かっては東洋のスイスなどと謂われた諏訪盆地の一角で、湖の西に設けられた水門から奔出する水は県南の伊那谷を下って静岡県に入り、そこで大河と化して遠州灘にそそぐ。あの天竜川である。

当然、小学校の同窓会は岡谷で多く開かれ、たまに例外があってもほとんど同じ信州の縄張りを越えない。このたび他県を選んだのは、女子の中に甲府に嫁し、しかも当地で政界の＜女史＞となった人が幹事役をつとめたからだと、あとで聞いた。

今回の同窓会はもう10何回目かになるという。私は過去に一度しか出ていないので、卒業後52年ぶりに初めて顔を合わせた人が総出席者60名中半数以上に達した。中に当時疎開児童だった同級生も2人いる。あまりの懐かしさに肩を抱き、手を握り合い、ついには涙ぐむような風景もあったが、これは同窓会ならありふれた現象であるかもしれない。

＜疎開＞などというからには、時代がずいぶんと古い。1945年、すなわち昭和20年の3月卒業だから、戦争末期のだれもがあえぎにあえいでいた時分である。したがって、冒頭に使った＜小学校＞というのはうそで、正確には＜国民学校＞の同窓会といわなければならない。

ついでながら、私はそのあと旧制中学（県立諏訪中学校）に入り、その4月から湖の対岸にある上諏訪まで約20分間の汽車通学を余儀なくされた。4ヶ月で終戦、その後学制が変わり、新制高校として発足した諏訪清陵高等学校を卒えるまで、6年間同じ線路を通学した。（ちなみに、このとき同じ中学に入った＜岡谷国民学校＞の幼なじみに現明治大学学長戸沢充則君がいる。ほかに、東大の法科を出て総理府に入り、消防大学校校長までのぼりつめた今井実君も遊び仲間だったが、彼は惜しくも10年前に他界した。）

さて、イントロが長くなったが、この同窓会の本番終了後、私は地元の数人に囲まれ、私が＜英語＞で飯を食むようになった経緯を聞きたいという、たいへん困った質問に遭遇した。だいたい、われわれは信州の山猿じゃないか、学校も山校といったくらいで町並みからかなり離れた山の中腹にあった、その小学校時代に外人というものを見た

こともないはずだ、英語はまったく無縁じゃなかったか -- などが彼らの思考の背景にあって、そんな環境下でなぜ？ということだろう。少し時代がかっていすぎないかと思ったが、そういえばそうだ、と私は納得した。

たとえば、この20年間私はたしかに大阪に通い詰め曲がりなりにも英語の指導職をうけたまわっている、延べ30数年来自分が経営に携わってきた会社の主業務は翻訳である、企業内研修講師としてのセミナーではそのテーマをEnglish technical writingと称している、大学で与えられた講義名は科学英語となっている、などなど、私を説明する合言葉はすべて＜英語＞に尽きるようである。しかし、なぜこんなことになったか、当人自体はっきり説明がつかないから、結局、なぜかの釈明はあいまいのままに終わってしまった。私としては、明大の現学長も消防大学校の元校長も、自分がそうなるとは思いもしなかったのではないか、と考えたいのだが、同窓いわく彼らの場合はその職業に就いたことに不思議はない、しかし、私については疑問が残るというのだ。まるで、私と英語の結びつきを怪しむかのようである。

そこで、この稿では、今日の自分をつくった真の契機は別にあるものと仮定した上で、小学校を卒えてから中学から高校卒までの時期に英語がどのように私に近づいてきたかを、あらためて振り返ってみたい。その内容はOSTECのみなさんに益するものを何も含んでいないが、英語をからめての一少年像をかいま見ていただけたら幸いである。

中学に合格したとき、これから学ぶ学科として何よりも興奮したのは英語だった。いま何気なく英語といったが、当時の私たちには（特に前にも述べた理由で）＜英語＞という言葉自体が身震いするようなインパクトを持っていたと思う。「キチクベイエイ」が町をはびこり、一部の大人の世界では英語＝敵性語として扱われていたようだが、中学生になった証しとしての英語は限りなく少年の矜持を包み込み、この言葉を発するたびに小学生の殻がはじけて自分が成長していくのだ、という自覚がいや増した。

ところで、私たちのころは、小学生の段階で英語を多少なりともかじっているという子はいなかったと思う。良家の子弟の場合はどうだったか、また中学校（女学校）に在籍する兄姉のいた子の場合はどうだったか -- このあたりはつまびらかでないが、少なくとも私自身に関する限り、アルファベットの体系がどんなものかも知らなかった。（もっとも、戦時のことで「ABCD包囲陣」などという物騒な言葉が新聞紙上を賑わせていたからABCDの4字くらいは読めていたかもしれない。）入学式前のある日、父がアルファベットとはこのようなものであると大きな紙に毛筆で書き、26文字の読み方と書き方を教えてくれた。私はそのときの父がいつもと違ってひどく偉い人に見えたという印象がある。（父は、当時郵便局に

勤務していたが、若い頃通信講習所を卒業しており、そのときローマ字で電信を打つためにアルファベットを覚えた、とその後種明かしてくれた。)

英語を勉強するからには、まず辞書が必要だった。時あたかも物資窮乏の折りで、書店に行って新しく買うということはなく、これは母が近在の実力者の家からもらってきてくれた。三省堂の「コンサイス英和」である。かなりすり切れていたが、その持主は同じ中学校の3年先輩で、前年海軍兵学校に入学していた俊才である。海兵のお兄ちゃんが使った辞書ということで、私は誇らかな気持ちでいっぱいになり、英語への情熱を人一倍燃やしたかと思う。父は、裏表紙の内扉に書いてあった「長野県立諏訪中学校生徒3年xxxx」の「3」と「xxxx」を丁寧に小刀でそり落としたあと、数字は「1」と書き直し、xxxxには私の名前を新たに書き入れた。

英語の読みを全く知らない状況の中で、私に初めて英文のパラグラフを読んできかせてくれたのはN.Y.という遊び仲間の上級生ボスである。彼は当時新設された岡谷中学校の2年生で、それが正しく発音されていたかどうかは不明だが、内容は"The first Persian War began in 490 BC".で始まる戦争の歴史物語であったことをいまでも鮮明に覚えている。中でも、ペルシャ戦争＝パーシャンウォーとくぐもった発音がとても魅力的で、私はしびれにしびれた。以来＜パーシャン＞という英語は私の脳裡から消えることなく、そのときの部屋の情景とともに生き続けている。

終戦後になって書店から辞書を入手したときの感激も忘れられない。それは旺文社の「エッセンシャル英和」だったが、定価に相当する金額だけでは売ってくれず、父の蔵書（というほどでもないが）から何冊かの古本を持ち出し、これと合わせて初めて自分の物になった。紙質も装幀も悪く、しばらく使っているうちに癖のついたページのところで本が割れてしまい、そのうちに糸もほどけてばらばらの無惨な様相を呈するようになった。表紙の厚紙をいったんはがし、麦の混じったご飯粒をへらで練り上げた糊をむき出した背の部分にこすりつけ、その上に厚紙をかぶせて補強し、最後におもて表紙と裏表紙全体に絹の布を貼ってなんとか使えるようにしてくれたのは、母である。結局この辞書は高校を出るまで私の手元にあった。ついでながら、中高校を通して私の使った参考書類はほとんどすべてがこのような形で耐久寿命を長らえた。補強用の絹の布は、私が幼児時代に着たよそ行きの着物を解体したものである。でんでん太鼓の紋様の一部が表紙の隅に見え隠れしていた本もあり、私にはそれが恥ずかしかったに相違なく、かばんから取り出すときは指先でその部分を自然に隠す習慣がついていたことを思い出す。

英語の参考書は例の＜小野圭もの＞だった。私は学校の授業のほかに、家で特別に英文法を勉強した覚えはない。しかし、使い古した小野圭（これも父が

部下からゆずってもらったもの）を机上に立てておき、わからないながらも時々のぞき見て新しい知識を得ることは、少年にとってこの上もない快感だったろうと思われる。

中学から高校まで英語の教師は一貫してT.N.先生だった。鹿児島の生まれで、早稲田大学を出た学士だと聞いていた。ほかに、その後信州大学に移られたM先生もおいでになったが、私には＜英語はN先生に教わったのだ＞という頑固な意識が強い。もっぱら暗誦を中心に授業を進められ、高校になると英語の時限は必ず複数の生徒による段落暗誦で始まった。私たちは＜暗誦先生＞とあだ名を付け、先生がアンショウのアにアクセントを置いて発音されていたので、私たちの呼び方もアを殊更に強調したアンショ先生となってどこか滑稽な味があった。この先生にはほかにれっきとした、しかしややふざけ気味のあだ名があったので、＜アンショ先生＞の方はむしろ生徒たちの敬称であったかと思う。

私は、この暗誦というのが英語を学ぶ上でことさらに重要な方法であると先輩諸兄から聞いていたので、一生懸命に暗誦した。だいたい10行程度のパラグラフを覚えるのだが、私はこの作業に朝の通学列車を利用した。前にも述べたように、通学のために汽車に乗っている時間はほぼ20分間あったので、この間に覚えるのである。時間に制限があるので、気力が充実し、確実に暗誦できたようだ。そして、汽車から降りて学校の正門に着くまでの10分間、何度も頭の中で繰り返してその出来栄えをチェックした。しかし、せっかく暗誦しても、その英語がすべてわかっているかどうかは疑わしく、多分に＜論語読みの論語知らず＞の傾向があったことは否めなかった。

学年が上がるにつれ、私にも知恵が湧いてくる。暗誦したものを教室でよどみなく発声でき、先生に褒められて有頂天になっていただけてはだめだ、いずれは揮発して消失してしまう。そこで、暗誦文を耳と口だけでなく、眼で確かめるために、何度も何度も紙に書いてみることを自分に課したのである。それも、ひとりぼっちでは成果の確認がおぼつかないので、友人を誘い合わせ互いに競い合った。その結果、単語を自然に正確に書けるようになり、単語を単語として覚えずに文の中のエレメントとして記憶することができた。この方法によって、私のかばんから英単語帳がなくなり、英文字の羅列を繰り返して単語をやみくもに記憶するという煩わしさから完全に解放された。

英語へのアクセスは何も英語の授業だけではない。中学２年のころ、G.Y.という先生に西洋史を教わった。この教師は脱線が多くテキストの進捗度は蝸牛のごとくであったが、私たちは眼を輝かせてそういう話に夢中になった。有名な人物のエピソードを語る段になると、いつもその人物の名前と関連する地名や建造物名を英語で板書してくれた。英語がちょうどおもしろくなっ

た時期であるから、私はこれらの固有名詞を英語で覚えることが楽しかった。歴史に残る言葉なども短いものは英語で全文を見せてくれた。たとえば、Bacchus や Solomon の綴りを覚え、"The die is cast." (賽は投げられた) のような言葉とその意味を知ったのはこの授業を通じてである。

「ゲーテは Ghoethe と綴るが、これはドイツ語としての読み方だ。綴りを覚えるには<ギョエテ>と読め」などとのたまい、さらには一般に知られている「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」というまさに知的な遊び文句の使い方まで教わった。

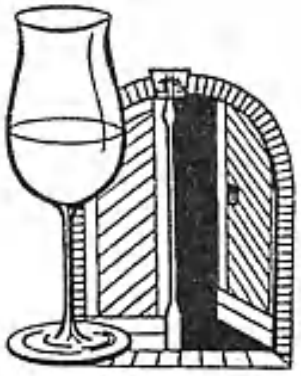
前記の「賽は投げられた」に関連して、私には忘れられない1つの思い出がある。そのとき、先生はシーザーの綴り Caesar を教えてくれ、ついでにその愛人である絶世の美人クレオパトラにまで話が飛んだ。そして、その後16世紀になりイギリスの Shakespeare という偉大な劇作家が「シーザーとクレオパトラ」(Caesar and Cleopatra) という史劇を書いたというくだりで、クレオパトラをクレオペイターと発音したのである。<トラ>でなくて<ター>となる理由はわからなかったが、英語で読むとこうなるのかと私は感動した。しかし、これは先生の間違いであることが判明したのは私が大学生になってからである。実際には、<パトラ>は<パトラ>でよく、時に<ペイトラ>と発音することがある、というのが正しい。とはいえ、私は G.Y. 先生をさげすむ気持ちは毛頭ない。むしろ、場合によっては、教師の間違いも教育の一端を担っているのではないかと思えるふしもある。ただし、このことの前提として、生徒側に教師に向ける畏敬心と、教えられたことに対する感謝の念が備わっていなければならないだろうが。

高校2年になって、自分の金で初めて英語の参考書を買った。書名は山崎貞の「新々英文解釈法」である。これは、大学を受験するために手に入れたのではない。なぜなら、当時私は何らかの理由があって大学志向ではなかったからである。少し誇張していえば、英語に惚れ込むほどの気持ちがあって、そのころ英語参考書の名著ともバイブルとも言われていたこの本を何としても欲しかったのかもしれない。それはともかく、<自分の金>というのは、アルバイトで稼いだ金を使ったからである。アルバイトは、父の勤め先での郵便物の仕分け作業であったり、例年8月始めに催される諏訪大社下社のお船祭りに便乗してのアイスキャンディー売りであったと思われる。「新々英文解釈法」は以後東京に出るまで、文字どおり私のバイブルとなった。

高校の最終学年では、相変わらずアンショ先生に英語を学んでいたが、このころは英語よりも国語(文学?)と漢文に関心が向いていたようである。「根無草」という名前のガリ版刷り同人雑誌を主宰し、1号分約30ページを徹夜で筆耕したことが何夜もある。また、漢文で文章を書いて県の視学にお褒めの言葉をいただいたこともある。卒業時の記念文集「破れ窓」(私たちのホーム

ルームである階段式の物理教室は木造校舎の片隅にあって、窓ガラスは破れっぱなし、冬は新聞紙を張りつけて寒さをしのいだ）では、私の提案で学友2名が対になり、それぞれ相手方のプロファイルを作文して該当箇所に掲載するという紙面をつくったが、私は相棒K.S.（現奈良教育大学心理学教授）を漢文で描写（活写とはいかなかったが）して面目を施した。この時期、いま思い起こしても青春のボルテージが一番高かったようだが、同人誌も漢文もその品質の程度は知れているので、いまはおぞき追憶の彼方に葬りさらんとのみである。

再び英語に戻ると、ひとつだけ自分にとって特筆すべき出来事があった。それは、どこかの出版社が主催して行われた全国英語模擬試験で上位入賞（2位）となり、1冊の英語辞書をいただいたことである。研究社刊、市河三喜博士編のLittle English-Japanese Dictionary（愛称「リトル英和」）だった。表紙の裏の白いページに英語とローマ字で2行にわたる署名があった。上段には＜To Tatsuro Mizukami＞、下段には＜From Kazuo Yamada＞と記したものである。当時の一橋大学山田一男教授の直筆で、私はこの辞書の入った郵便小包を開けた時のうれしさをいつまでも忘れることはできない。私はそのころも、いわゆる受験生ではなかったので、このようなコンテストを受けたのは不可解だが、多分誰かに誘われて参加したのだろう。私はこの辞書をいつでもポケットに入れて持ち歩いた。その結果ぼろぼろになって使用不能に至ったのであるが、それは勉強したという証左ではなく、ポケットの中で汗に塗れた指先が働きすぎたからだと承知している。

はからずも、長く書きすぎた。しかし、このように少年時代を英語をキーにして辿っていくと、あのハングリの時代に英語という未知で魔性のエイリアンが私の中に入り込んできた様子が自分でもはっきりしてきたように思われる。この他にも、私にまつわってきた英語関連の思い出が、おぼろげながらも次から次へと浮かんでくるが、それらはもはや読者に退屈であろう。いま英語で粥をすすっている私自身の素地としては、ずいぶん貧弱なものだと内心忸怩たるものがあるが、それを言っても始まらない。

このあと、私は大学の英米科に入り、よそから見れば本格的な英語の世界に触れる学徒になったのであるが、この信州の山猿は英語を象牙の塔内でじっくり味わっているわけにはいかず、結局は英語屋もしくは実務英語家になってしまった。その辺の成り行きについては、許されればジャーナルの次号に書いてみたいと思っている。